

■ 書 評



精神医療・診断の手引き —DSM-Ⅲ はなぜ作られ、 DSM-5 はなぜ批判されたか—

大野 裕 著
金剛出版
2014 年 3 月 190 頁
本体価格 2,400 円＋税

本書でとりわけ印象的だったのは、ギリシャ神話「プロクルステスのベッド」の寓話である。山の中で宿屋を営んでいる迫剃がいて、宿泊客を寝かせて、ベッドから足がはみ出せば足を切り、ベッドの端まで足が届かない人は、ベッドの大きさに体を伸ばして命を奪ったという。たちの悪いことに、背の高い人には小さいベッドを、背の低い人には大きいベッドをあてがうという念の入れようである。我々臨床家が操作的診断基準を誤って使用して、自分の理論や経験に、精神症状に苦しむ人を合わせていないか？ という警句としてこの残忍な話を引用した Kuyken らの著作が紹介されている。

手に取った当初は本書の「手引き」というタイトルと、装丁の教科書的なデザインから、DSM-5 の的確な使い方を論じた診断学の本かと想像したが、まずは、なぜ DSM が生まれたのか？ その歴史について、著者の解釈、解説を交えて紹介される。DSM と ICD、すなわちアメリカ精神医学会と WHO の温度差、「神経症」診断に関する日本とアメリカの歴史的な課題、アメリカ精神医学会の利益相反問題、オシュロフ事件など、DSM の 5 回の改訂がなされた過程の背景にある、人と社会と精神医学の間に起こった事件や、軋轢、矛盾を象徴するエピソードも数多く紹介されている。これらの事例は、他書でも紹介されているが、DSM-IV の制作に携わった後、引退し、DSM-5 を批判する立場に回ったアラン・フランセスと長きにわたる交流がある筆者であるがゆえに言及でき

て、ここまで端的に語られている点は貴重である。DSM を鵜呑みにせずに、背景も理解して診療に臨みたい読者には、ガイドラインとしての DSM の傍に本書を置くことを勧める。それにしても、筆者のクライアント向けの本は、優しい語り口で、読んでいるうちに、心が軽くなるような、温かい口調だが、医師や治療者に向けた本書の論調は、表現が平易で複雑な事象も腑に落ちるわかりやすさだが、その分、鋭く胸に刺さるようでもあった。その後に、心に響く表現が続く。先に翻訳されたアラン・フランセスの著作「正常を救え」（2013 年講談社）を意識してか、重要な表現が、それぞれ印象的な表現で何度か繰り返される技法が取られている。

「症状だけが、その人ではない。その人の持っている力、その人を取り巻く環境、その人の存在を統合的に判断する必要がある。しかし診断の信頼性を高めるということと、精神症状に苦しむ人を理解するという距離を、私たちはまだ埋めきれていない。」

「精神医学は人間の科学であり、人間的関わりこそ精神医学の先進性である。」

旅人を悪意を持って待ち伏せていた盗賊のたとえを見て、自分の診療の姿勢はここまでひどくはないとは思いつつも、「精神科医たるもの知らないと恥ずかしい」というような圧力を持つ DSM を、忙しい診療の合間に、せつせと覚え、よく理解した上で、使いこなしたつもりでいて、実は、その人全体ではなく、ガイドラインにある症状があるかないかだけに注目する歪んだ認識になってしまっているならば、この盗賊とさして変わらない面は、残念ながら自分にもあるかもしれないと内省させられた。

本書を読み進める過程で、DSM から精神医学の裏表に潜む諸問題を改めて見つめ直し、普段の診療を振り返ることもできたように思える。いうならば、DSM と精神医学についての認知の是正が試みられた一冊であると言えないだろうか？

(今村弥生)